郷土ちがさき

（大山寺　向拝の彫刻）

第 159 号
発　行　令和6年1月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会　長　平野文明
編集責任　平野文明

大山寺 向拝の彫刻「文覚荒行」　平野文明 ……2
越前守忠相ノート三「越前守の業績」　石黒　進……7
石狩市の鮫様　二例を紹介　加藤幹雄 ……12
風（自由投稿欄）歌六首　今井文夫／私の趣味　吉川弘子／ロンドンのお寿司屋さん　川村美子／小津安二郎流「カレー鶏すき焼き」を研究　長谷川由美 ……16

お正月ですから真面目に書きます。

新しい年あけると人は生まれ変わります。失敗やへんな事を繰り返した私はチャラになって、新たな力を得、希望に満ち、何の悩ましさもない本当の私になりました。ふるさと熊本では、元旦に最初に汲む水を「若水」といい、これで顔を洗うと若返るといわれています。お正月は実に便利にできているなと思います。

若返りの機会はお正月だけではないことを思い出しました。毎年繰り返される浜降祭では、神様方が神輿に乗って茅ヶ崎南湖の海岸までお越しになるのですが、あれは「みそぎ」をなさるのです。神様でも、一年経つといらないものが身に付くらしく、潮水を浴びて復活なさるのです。

朝のラジオニュースで聞いたのですが、二年前の今日（暮れの十七日）、大阪でビル四階にあった病院が放火され多くの人が不幸にみまわれた。容疑者も同時に亡くなり、真相を問うことができないので、関係者は気持ちの区切りが付けられず、時と共に悲しみが増すとのことだと。区切りというものは必要なのです。

あっ、まだあった。当選したが、やらかした事を無かったことにしたいのでもう一度臨む選挙。（やっぱり真面目な文章は無理だ。）

（令和六年一月一日　茅ヶ崎郷土会々長　平野文明）

大山寺向拝の彫刻「文覚荒行」

平野文明

一

大山寺本堂には見事な彫刻が各所に施されています。中でも、入口の向拝柱（こうはいばしら）を横に繋ぐ太い貫の上の彫刻と、本堂の柱と向拝柱を繋ぐ虹梁（こうりょう）の彫刻は手が込んでいて、見とれます。

向拝（こうはい）とは、神社の拝殿やお寺の本堂の正面の、建物にあがる階段を覆って、差し出ている屋根の下の吹き抜けの部分をいいます。差し出ている端を支える二本の角柱が向拝柱で、この柱間を繋ぐ貫にはいろんな彫刻が置かれていることが多いのです。目立つ所で、私が見た中では、神社でもお寺でも龍が多いようです。また、寺社の縁起や祭神にまつわる物語り、中国の故事が彫ってある事もあります。なぜその絵柄になっているのか、簡単に分かるときもありますが、分からないときも多々あります。

さて、ここに取り上げるのは伊勢原市の大山寺（伊勢原市七二四　真言宗　山号は雨降山）の向拝にある彫刻です。

令和五年十一月二十五日の朝日新聞の湘南版に、「大山寺本堂・箱根美術館など国登録文化財に　７カ所14件答申」という記事が出ていました。内容は、本稿に関係あるところを抜粋すると次のとおりでした。

「国の文化審議会が24日（筆者注　令和五年十一月）に開かれ、県内からは伊勢原市の大山寺本堂や箱根町の箱根美術館など７カ所14件を国登録有形文化財（建造物）に登録するように文部科学大臣に答申した。

大山寺は大山の中腹に立つ真言宗の寺院で、本堂は１８８５（明治18）年に建てられた。屋根が張り出した正面の向拝には龍などの彫刻がほどこされ、大山詣りの隆盛ぶりを伝える仏堂だという。」

記事に添えられた写真に写っているのは、唐破風造りの屋根の下に、向拝柱の上部を横に繋ぐ貫に這う二頭の龍、龍の間にあるメインの彫刻、奥には「大山寺」の扁額（へんがく）も見えました。ただ、新聞に載る写真は細かいところが不鮮明だったので、ここには筆者が撮影した画像を掲げます。さて、このメインの彫刻が何であ

るかが、今回のテーマです。新聞記事には「龍などの彫刻」とあるだけでした。

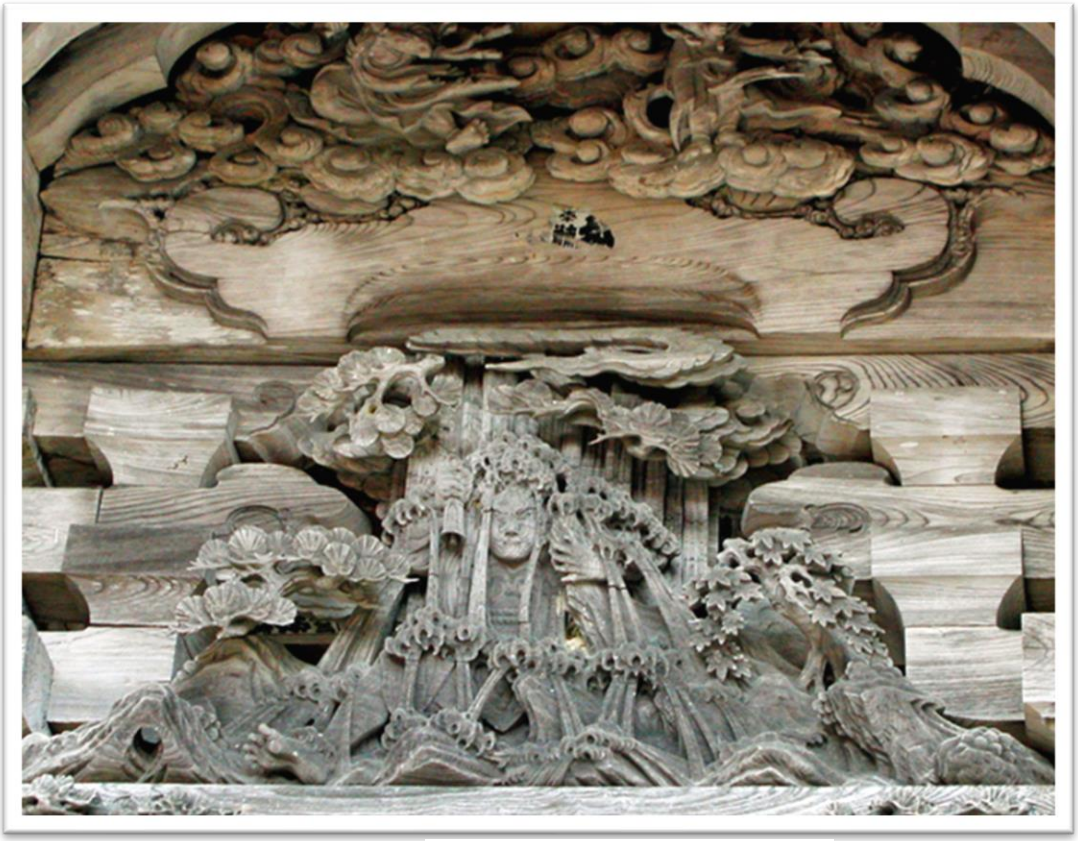
この彫刻を見た人はたくさん居られることでしょう。そしてすでに絵柄が何であり、何に由来しているか分かっている方もあることでしょう。分かっている方は以下の文章は飛ばしてください。

二

メインの彫刻を紹介します。その写真画像は下段です。細かいところが分かりにくいので、写真から起こした素描を本誌表紙に載せました。彫刻は上下二段に分かれていて、上段は雲に載る二人の童子が下方をみおろしている図です。童子たちの視線を追うと、下段には滝に打たれてガンバッテいる人物がいます。この三人が誰であるかは絵の中に示しておきました。名前が分かればこの彫刻の絵解きはできたようなものですが、問題の一つ目、「この彫刻は何であって私たちに何を訴えているのか」、問題の二つ目、「彫刻の絵柄のモデルはなにか」という順に話を進めます。

実は、この絵柄には出典があるのです。それを次に紹介します。出典は『平家物語』です。各社から刊行されていますが、新潮日本古典集成の一冊に収められている『平家物語』中巻中の「文覚荒行」（五八～六一頁）を転記します。かっこ書きは私が加えた部分です。読みやすくするために句読点を補ったり、改行したり、文章を少し変えた所もありますが、大意は変えておりません。

かの文覚（もんがく）と申すは、渡辺の遠藤左近将監茂遠（もちとう）が子、遠藤武者盛遠（もりとう）とて、上西門院の衆なり。十九の年、道心をおこし、出家して、修行に出でんとしけるが、



メインの彫刻画像

「修行というはいかほどの大事やらん、ためしてみん」とて、六月の日の、草も動かず照ったるに、片山の藪の中に這い入りて、仰向きに伏し、虻ぞ、蚊ぞ、蜂、蟻なんどという毒虫どもが、身にひしと取り付きて、刺し、喰いなんどしけれども、ちっとも身を動かさず。七日までは起きもあがらず、八日というに起き上がりて、

「修行というはこれほどの大事か（この程度の大変さか）」と人に問えば、「それ程ならんには（おぬしのようにしたら）、いかでか命も生くべき（命がもつまい）」と言うあいだ、（文覚は）「さてはやすきことごさんなれ（修行は何の事もない）」とて、修行にぞ出でにける。

熊野へ参り、那智籠り（なちごもり＝那智での修行）せんとしけるが、まず行のこころみに（小手調べに）、聞こゆる（有名な）滝にしばらく打たれてみんとて、滝のもとへ参りたれば、頃は十二月十日あまりのことなるに、雪降り積もり、つらら凍てついて、谷の小川も音もせず。峰の嵐吹き凍り、滝の白糸垂氷（たるひ）となりて、みな白妙におしなべて、四方の梢も見もわけず（見分けもつかない）。

しかるに文覚、滝つぼへ降りひたり、首まで浸かりて、慈救の呪（じくのじゅ＝不動明王の呪文）を満てけるが（定まった回数唱えたが）、二、三日こそありけれ（二、三日はともかく）、四、五日にもなりければ、こらえずして文覚浮き上がりにけり。数千丈みなぎり落つる滝なれば、なじかはたまるべき（どうしてそのままいられようか）。ざっとおし落とされて、刃（やいば）のごとくに、さしもきびしき岩つぼの中を、浮きぬ沈みぬ五、六町こそ流れたれ。ときに、いつくしげなる（そのとき美しい）童子（不動明王に給仕する八人の童子の内の）一人来たりて、文覚が左右の手を取って引きあげ給うに、人（辺りにいた人）、奇特（きどく）の思いをなし、火を焚き、あぶりなんどしければ、定業（じょうごう）ならぬ命ではあり（前世から定まった命ではないので）、ほどなく生き出でにけり。

文覚、少し心つきて（我にかえって）、大の眼（まなこ）を見いからかし、

「われ、この滝に三七日（二十一日間）打たれ、三洛叉（さんらくしゃ＝三十万遍。不動呪文を三十万遍唱えること）を誦（じゅ）せんと（唱えようと）思う大願あり。今日、わずかに五日になる。七日にだにも過ぎざるに、何者がここへは取って来たるぞ（だれが助けてここに運んだのか）」と言いければ、人、身の毛もよだってもの言わず。（文覚は）また滝つぼにたち返りて打たれけり。

二七日（十四日め）というに、八人の童子来たりて、文覚が左右の手をとらへて、引き上げんとし給えば、散々に組みあいてあがらず。三日というに（それから三日後に）、文覚ついにはかなくなりにけり（息絶えた）。「滝つぼを穢（けが）さじ」とや（死者で穢すまいと）、びんづら（髪を）結ったる童子二人（矜羯羅童子＝こんがら童子と制多迦＝せいたか童子）、滝の上より下って、文覚が（頭の）頂上より手足のつま先、手の裏にいたるまで、よに（まことに）暖かに香ばしき御手をもって撫でくだし給うとおぼえければ、夢の心地して生き出で、

「そもそも（いったい）いかなる人にてましませば、これほどにいつくしみ給うらん」と問いたてまつるに、

「われはこれ、大聖（だいしょう）不動明王の御使い、矜羯羅、制多迦という二童子なり。『文覚、無上の願を起こして勇猛の行

をくわだつに、力を合わすべし』との明王の勅（ちょく＝仰せ）によって来るなり」と（童子たちは）答え給う。文覚、声をいからかして、「明王はいずくにぞ」、（二童子は）「兜率天（とそつてん）に」と答えて、雲井はるかにのぼり給いぬ。（文覚は）たなごころを合わせてこれを拝したてまつる。

「されば我が行をば大聖不動明王までも知ろしめされたるにこそ」と頼もしゅうおぼえて、なお滝つぼにたち返りて打たれけり。

文覚は、源頼朝に平家追討の挙兵を進めるため、頼朝の父 義朝のどくろを見せて決意を迫ったという話があります。

平家物語の「文覚荒行」は、一九歳で出家し、修行に出て、まず那智の滝に打たれる場面から始まります。辺りが凍り付いた十二月のことで、滝壺で不動明王の呪文を唱えますが、四、五日経って気を失い、お不動様の眷属の童子一人と村人達に助けられます。しかし、いらぬお節介だといって、再び滝壺に戻ります。さらに十四日目には、見かねた八人の童子がさしのべる手を振り払ってしまいます。

そんなことをしていて三日後、とうとう命を失いました。すると制多迦童子と矜羯羅童子がやってきて、文覚の遺体を引き上げ、その御手でねんごろになでさすりますと、不思議と文覚は息を吹き返し、その親切は何のためだと問いかけます。童子たちは、「お不動様が、文覚は無上の願を起こして勇猛の行を企てているので、その願いを遂げさせるために力を貸してやれとおっしゃったからです」とこたえ、不動明王の兜率天に帰って行きます。

文覚は両手を合わせ、「我が修行を不動明王様も見守ってくださっている」と喜び、三たび滝壺に帰っていきます。

第一の問題に対する解答です。向拝にあるメインの彫刻は、平家物語にある文覚上人の荒行の場面で、平家物語は文覚を引き合いに出して、不動明王の偉大な力と功徳のありがたさを説いているというのが私の解釈です。

三

大山寺のこの彫刻はいつ頃作られたのでしょうか。

向拝彫刻には、その裏面に作者の名が彫られているものもあります。この彫刻では見つけることができませんでしたが、寺のホームページに本堂建築の経過が次のように載っています。本稿に関係するところを抜粋します。算用数字を漢数字に替え、文体は改めました。

○本堂は明治初年の廃仏毀釈によって破壊されていたものを明治十八年に全国の 信者たちの寄進によって再建された。
○本堂周辺に彫られた彫刻の数々のすばらしさは一見に値する。
○明治六年、現場所に仮屋を建てご本尊や僧職、寺宝が移った。
○明治九年、手斧始め。
○本堂のすばらしい彫刻の数々は当時名人といわれた名匠　手中明王太郎がかけつけ全霊をうちこんで彫刻を行った。
○明治十七年十一月、上棟式。
○明治十九年十一月二十一日、入佛式。

この後は、明治二十一年　大堂屋根を前面銅版葺き替え、昭和六年　銅版の一部を葺き替え、昭和四十五年　鉄板部のみ鉄板を上乗せ修理、昭和五十八年　全面を銅版にて葺き替え、平成十二

年　台風による災害のため本道裏の山が崩れ宝物殿の一部と本堂の屋根の一部が破損、ご本尊が本堂内に移られる、平成十四年神奈川県や伊勢原市の協力により裏山の復旧補強工事が完、と続きます。

本堂の建設時に彫刻が完成しているのなら、手斧始めの明治九年（一八七六）から上棟式を行った明治十七年（一八八四）の間ということになります。また、「彫刻の作者は手中明王太郎」と、大変興味深い記述がありますが、このことを示す他の資料も欲しいところです。

四

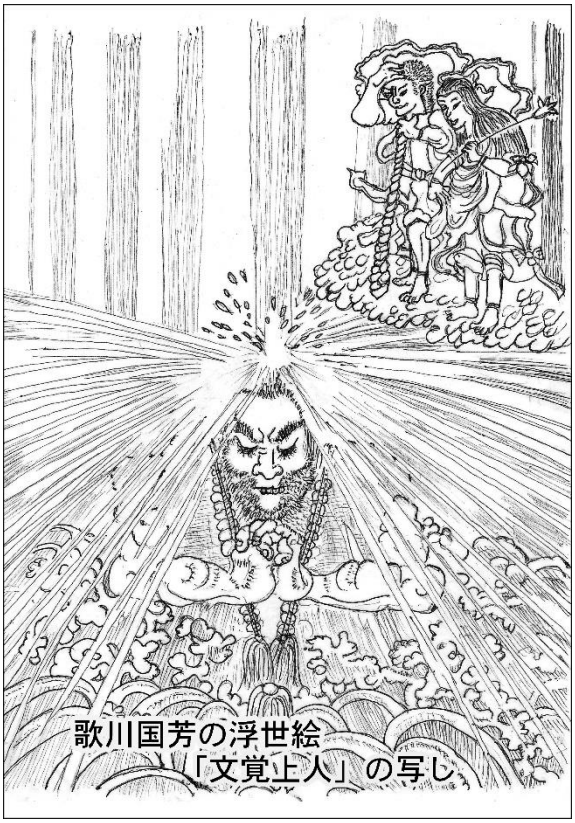
問題の二つ目、「この彫刻にモデルがあるのではないか」ということに話を進めます。

「文覚荒行」の一節は多くの人に好まれたらしく、絵画にもなっています。古くは、熊野権現の信者獲得のために熊野の御師や比丘尼たちが各地に持ち歩いて絵解きした「熊野那智参詣曼荼羅」があります。この曼荼羅の一部に那智の滝で修行する文覚が描かれています。

また、江戸から明治時代の浮世絵にも文覚荒行の絵柄がたくさん見られます。ネットを検索してたまたま目にした例を挙げると○歌川国芳（一七九八～一八六一）の「六様性国芳自慢　文覚上人」、○歌川国貞（三代目豊国　一七八六～一八六五）「高雄の文覚紀伊国那智山諾大瀧篭大願荒行之図圖」、○月岡芳年（一八三九―一八九二）「文覚上人荒行之図」、○落合芳幾（一八三三―一九〇四）「今様擬源氏　文覚上人」）などがヒットしました。丹念に探すともっとありそうです。歌川派の絵師たちによるものが多いようですが何か理由があるのでしょうか。

これらの浮世絵の中で気になるものがありました。宇田川国芳の「六様性国芳自慢　文覚上人」という作品です。「浮世絵」・「文覚荒行」で画像検索すると、たくさんの作品の中に出てきます。著作権は切れているでしょうが、所有者の許可も必要でしょうから、私が描いたその写し絵を次に掲げます。

どうどうと落ちる滝水をかぶりながら不動明王の呪文を唱える文覚上人と、それを上空から見下ろす制多迦・矜羯羅の二童子が登場しています。二童子の立っている位置が彫刻とは違っていますが、文覚の様子は彫刻に似ています。国芳は一八六一（文久元）年に無くなっていますので、彫刻が本堂建設時の明治初期に作られたとしても齟齬はありません。



歌川国芳の浮世絵
「文覚上人」の写し

また、今回はまだ紹介する準備が整いませんが、大山寺本堂の内部、向拝側の壁に数枚の絵馬が掲げてある中に、文覚荒行の図の絵馬があり、奉納者は「茅ヶ崎十間坂　岡崎常二郎」とあります。国芳の絵に似ていますが、国芳より時代が下る落合芳幾（一八三三―一九〇四）の浮世絵「今様擬源氏　文覚上人」がモデルではないかと私は思っています。

五

大山寺本堂が国登録有形文化財（建造物）になったことをきっかけに、興味を抱いていた同本堂の向拝彫刻についてまとめてみました。本稿の要点は次のとおりです。

①彫刻の絵柄は『平家物語』文覚荒行の場面であること。

②『平家物語』の「文覚荒行」の一節は、不動明王の偉大な力と功徳のありがたさを表していること。

③古来、大山の不動堂に祭られる不動明王に対する信仰が関東各地に広がっていた。明治初年の神仏分離で不動堂は破壊され、不動三尊は、現在の大山寺で祭られることになった。大山寺を建造するに当たって、本堂の向拝彫刻は不動明王の威力を表す「文覚荒行」の場面でデザインされていると考えられること。

④彫刻のデザインには、歌川国芳の浮世絵「六様性国芳自慢　文覚上人」の絵柄が使われていると考えられること。

なお、本稿に使った、彫刻「文覚荒行」を素描するにあたって、当該彫刻の写真撮影などで、会員の加藤幹雄さんの協力を得ました。お礼を申し上げます。

（令和五年十二月二十一日記）

大岡越前守忠相ノート（その三）

越前守の業績

石黒　進

【年譜】

一六七七（延宝五）　大岡忠吉家（一七〇〇石取旗本）の三代忠高の四男に生まれる。

一六八六（貞享三）　大岡忠世家（一九二〇石取旗本）二代忠真の養子に入る。

一六八七（貞享四）　五代将軍綱吉に御目見。旗本格の認証。
一七〇〇（元禄十三）　家督を相続（かぞえで二四歳）。無役、担当業務なし。家禄一九二〇石。
一七〇三（元禄十六）　御書院番。
一七〇四（宝永元）　御徒頭。布衣（ほい）を許される＝六位相当。
一七〇七（宝永四）　御使番。
一七〇八（宝永五）　御目付（諸大夫）。
一七一二（正徳二）　遠国奉行（山田奉行）。従五位下（朝散大夫）に叙せられる。能登守。
一七一六（享保元）　普請奉行。
一七一六（享保元）　吉宗、八代将軍位就任。享保の改革。
一七一七（享保二）　町奉行（四一歳）越前守。
一七一八（享保三）　町火消を組織。
一七二一（享保六）　目安箱設置。小石川養生所開設。
一七二二（享保七）　経済諸政策。米価・株仲間・貨幣流通。書物の奥付義務化。
関東地方御用掛拝命。新規代官を任命（三人）。
新田開発　サツマイモの奨励策。
一七二四（享保九）　『享保度法律類寄』『撰要類集』
一七二五（享保十）　二〇〇〇石加増。
一七三六（元文元）　貨幣改鋳。
一七三六（元文元）　寺社奉行。二〇〇〇石加増（五九二〇石）、さらに臨時加増（足高）を加えて一万石で大名格となる。
一七四二（寛保二）　『公事方御定書』
一七四八（寛延元）　奏者番、足高分だった四〇八〇石が正式に加増され、知行地（領地）が増え一万石取りの大名となる。三河国・西大平（本貫）に陣屋を設ける。
一七五一（宝暦元）　吉宗死去。葬儀担当。寺社奉行辞す。
一七五一（宝暦元）　十二月一九日死去。享年七五歳。

越前守忠相は今にその名を残すことで知られるように、大変優れた人であっただけでなく、特に町奉行として江戸庶民に人気があった。これが後に「大岡裁き」、「大岡政談」というお話を生み出す元となる。（文献①）

しかしそのお話のほとんどが作り話で、それも他者の逸話などからの借用だという。出典（話のでどころ）も大体特定できるそうだ。では、お話が作り物なら、何でそんなに人気があったのだろうか…。

大岡裁きで有名になり、名が残ったのではない、偉い御奉行様だったから尾ひれのようにたくさんの逸話が付け足された。なぜそんなことが起こったのか。

越前守はどういう立場の人で（本誌一五七号　ノートその一）、この地とどんなつながりがあるのか（本誌一五八号　ノートその二）と順にみてきたので、次にこの問題を取り上げる。彼はいったいどんな仕事をした人なのか。

【Ⅰ】遠国奉行

「大岡政談」、「大岡裁き」ということばからわかるように、彼のお話は大体、町奉行所を主な舞台とする、裁判にまつわるエピソードだ。それをここで取り上げることもないだろう。その中に彼の出世に関する逸話もある。たとえば、「わりとはっきりものを言うタイプ、それが紀州和歌山の大名であった、後の第八代将軍吉宗に気に入られた」という話。俗説が残っている。本当なら幸運なことであった。しかしどうもこれらの話もほとんど作り話のようだという。

八代将軍吉宗の就任についても多くの話や逸話が残っている。

吉宗は、七代将軍家継が八歳で早世した後、いろいろいきさつはあるが、本命ではなかった紀伊徳川家から入って徳川宗家を嗣ぐことになる。その時に紀伊からわずか四〇人の家臣を引き連れて入り、前例に反して紀伊徳川家もそのままの形で存続させた。また早々に第六代将軍綱吉のブレーンだった間部詮房（まなべあきふさ）・新井白石という御側用人を廃したり、話題には事欠かない。その中に「大岡越前守の抜擢」がエピソードの一つとして含まれている。まずは簡単に触れておく。越前守の出世のスタートがここにあるからだ。

この話は山田奉行（遠国奉行）として難しい土地争いを公平に裁いた、という話が元になっている。これが彼の抜擢の根拠となったという。遠国奉行とは、徳川将軍家のお膝元（東国、いわゆる関八州）を遠く離れた、日本各地の重要な所領を管理する代官の一つ。「山田」とは伊勢市の「宇治山田」のこと。つまり実質　伊勢神宮の行政管理官（長）である。

山田奉行は伊勢山田の大廟を守護し、遷宮祭祀を掌り、伊勢志摩の訴訟を聴断する役。千石高、御役料一五〇〇俵。配下は、与力（寄騎）六騎、同心七〇名、水主（かこ）四〇名。（『江戸幕府役職集成』）

伊勢の神宮が国の「本宗（ほんそう）」、日本国民の総氏神とされたのは明治時代からである。（本宗とは、すべての神社の上に立つ神社。『宗教年鑑』神社庁の表現。）新しい国の精神的なよりどころとして、いわゆる「神道」を採用したのだ。宗教のような、そうでないような曖昧な信仰の体系を、政府権力の権威づけに用いることとした。そのために親しみもこもった「お伊勢さん」ではなく、本宗として必要以上に荘厳さを演出しなくてはならなかった。権威付けのた

めに明治新政府によって伊勢神宮の雰囲気はそれまでと一変した、と言われている。

江戸時代まではそんな過剰な演出はなかった。だからこの時代の伊勢神宮は今とはかなり異なる存在だったようだ。江戸時代は、庶民には物見遊山などの贅沢は許されなかった。しかし、信仰のためのお参りは別だ。病を癒やす湯治と並んで庶民にも旅をすることができる格好の理由だった。「寺社詣で」は療養のための「湯治」と並ぶ庶民の大きな喜びであった。

江戸庶民にとっては相州、相模国の大山が、数日の旅ということで絶好のポジションにあった。だから多くの参拝客で賑わったことはよく知られている。茅ヶ崎辺りもその恩恵にあずかっている。つまり、そのおかげで相当うるおったのだ、特に街道沿いの村、宿場などは。その上を行くのが伊勢参りである。相模国の農民と同様、江戸の人々にとって、伊勢神宮詣では憧れの旅だった。途中の各地にお参りする「オプション」も、京・大阪、あるいは熊野にまで足を伸ばす「スペシャルプラン」もある。日程、そして費用だけでなく、体力からもこれ以上は望めない限界の旅、だったのだろう。その経費を何年もかけて積み立てるという一生の夢の実現。現代の海外旅行の比ではないかもしれない。だから「お伊勢様」はただの神社でも観光地でもない、最高の人気スポットだった。山田奉行はその管理責任者というから、相当な力量が要請される地位だったはずだ。そして注目もされたことであろう。

また、伊勢の地に接する松阪(現　松阪市)は御三家の一つ、紀州藩の御領地でもあった。そこで、紀州藩と山田奉行管轄地間の土地争い、というややこしそうな問題点が生まれたりもする。それが、大岡越前守忠相出世物語として語られている。

確かにそういう事例はあったらしい。しかし記録と照らしあわせてみると、それはどうも忠相のずっと前にあった事件らしい、という。

ただし、それ自体は単なるお話であるかもしれないが、彼の奉行としての力量、あるいはその噂話が紀州の殿様だった徳川吉宗（一六八四生～一七五一卒、紀州藩主　一七〇五～一七一六在職）の耳に届いていた、ということは十分考えられることである。そしてそれが後に第八代将軍となった徳川吉宗による、忠相の町奉行への抜擢につながった、ということもあり得ないことではない。また、それが作り話に結びついたとも。

このお話もここまでとするが、抜擢の経緯より、それに応え大活躍した大岡越前守の力量にむしろ注目すべきではないか、とも思う。

年譜を見てもわかるように、越前守の実質的なスタートはこの遠国奉行就任だったと見てよいだろう。とにかく、山田奉行を五年ほどつとめた後に江戸に戻されて、一旦普請奉行を経てからすぐに江戸町奉行に任命されることになる。これから彼の本当の活躍が始まる。

ところが、着任の初期からすでに「優れた御奉行だ」という評判があったらしい。だから逆に「噂ほどでもなく、がっかりしたことのいい例」というような世評が伝えられている。

「わるくもなし　沙汰ほどにない物　飛騨のからくりと大岡越前守」享保七年（一七二二年）頃の、江戸「御府内」で書かれた「物揃　ものぞろえ」というものだそうだ。（文献②）

「がっかりした」というが、その前提となるのは越前守が「大いに期待された御奉行様だった」ということだ。なぜそういう期

待があったのかがわからない。山田奉行としての優れた業績が噂にでもなっていたのか。紀州とのいざこざばなしは越前守の話ではないということだったけれど。山田奉行という難しい職務をそつなくこなした、程度の話で「今度の町奉行は期待できそうだ」という沙汰になったのだろうか。たいした根拠もないが新しい奉行への期待、少しはやってくれるのではないか、という思い。それまでの慣例法的先例主義、あるいは恣意的な運用など、お裁きの不確かさに対する不満が蓄積していたところにそれに対する公正な裁きを期待した…。

確かに時代は曲がり角にあった。詳しいことはとても論ずる立場にないが、幕府財政の行き詰まり、貨幣経済（上方の銀本位と関東の金本位制の関係も絡む?）から起こる物価問題、天災による不作、あるいは武士の武断政治から文治主義への転換、それにともなう法典整備などなどいろいろな改革が必要となった。ここに将軍吉宗と官僚としての町奉行越前守忠相が登場する。これが『享保の改革』と呼ばれる一大改革だったようだ。文献②大石慎三郎の資料には「元禄の大地震のあとしまつや、また御目付時代の活躍から、大岡越前守忠相が前途有望な官僚として幕府内で注目されていたとだけ記されている。この辺は、どうもよくわからない。

ところで、すでに述べたように町奉行への昇進は吉宗が第八代将軍となってからの抜擢人事ということになっている。享保元年（一七一六）、忠相、四一歳という異例の若さでの就任、普通は六〇才ぐらいの旗本がつく地位だったという話がある。しかし家格から言えば妥当な人事という理解もできるとか。いずれにせよこの地位は幕臣にとってあこがれの職だったそうだ。多忙であるということは逆に能力さえあればやりがいのあるポストだったのだろう。そして江戸っ子の評定の格好の対象にもなる。それを立派にやり遂げた、ということは確かなのではないか。異例のロングランは、ただ法制度の整備という課題（後述）に取り組むためだけとも思えない。

【Ⅱ】町奉行

町奉行の仕事に限らず幕府の仕事は、今とは大きく違っている。「大岡政談」は「大岡裁き」とも呼ばれ裁判の話が中心だが、それは一般受けする「お話し」としての姿だ。実際は行政官僚としての業績がはるかに大きいように思う。

徳川政権の特徴　（1）将軍の権威（2）職責と家格
（3）複数定員制（4）司法・行政未分化　（文献②）

享保七年（一七二二）は幕政の大転換期で、町奉行の忠相は、本来は勘定奉行の管轄となるはずの「（関東）地方御用掛」を命ぜられている。それからずっと延享二年（一七四五）にこの職の辞任を認められるまで担当した。民政についてはよく語られるのが「小石川の施療院」と「町火消しの組織」であるが、関東地方御用掛の職務として、新田開発や治水事業などとともに、青木昆陽の救荒食のサツマイモ栽培を奨励したりしている。

こういう所でも彼の名前が「歴史」として今の世まで残されているのである。サツマイモは茅ヶ崎（の特に南部）では見逃せない農産物だった。筆者の父の代までは茅ヶ崎の砂地は辻堂までずっと一面のサツマイモ畑だったと聞いている。

町奉行所には、配下として与力二五騎、同心一二〇人が置かれた。それでも職員不足で、とても手が足りないほどの重責だったようだ。南町奉行は、北町奉行と月交代の当番制で江戸の事件の

裁きを行った。しかし、それだけではなく、裁判官、司法官僚でもあり同時に行政官でもあった。今で言う「都知事」のような仕事を兼務している。担当地域は都知事よりも大きい。まさに八面六臂の活躍だったように見える。

また、江戸町奉行は都知事と裁判官、さらには警察の長官（警視総監）を兼ねたようなもの、とも言われている。江戸御府内の寺社地・武家地以外の地域を担当し、民政と警察、裁判（公事方）を掌るという意味で正しい理解といってよいだろう。

明治初年の調べで、江戸の六割が武家地、二割が寺社地、残りの二割が町地だったという。（文献③）

現在は、道・府・県に知事がいるが、「町奉行」は江戸にしかなかった。各地の領主、大名の裁量で自治が行われていた。徳川家、幕府が治める遠隔地には奉行、代官、そして独自に地名のつく町奉行、例えば「大坂町奉行」「京都町奉行」があったがこれはあくまでも地方官である。「町奉行」と呼ばれる強い権限を持った役人は江戸にしかいなかった。

それはさておき、大岡越前守忠相が、町奉行二十年、寺社奉行十五年、併せて三十五年間、評定衆の一員として司法行政の中心を担い続けたことは極めて重要だと思う。これについては項を改めて研究、検討するつもりである。

【引用・参考文献】

①『大岡越前守忠相　名奉行の虚像と実像』辻達也　中公新書　一九六四年
②『大岡越前守忠相』大石慎三郎　岩波新書　一九七四年
③『江戸の町奉行』石井良助　明石書店　二〇一二年
『大岡裁きの法律学』岸本雄次郎　日本評論社二〇一一年
『江戸のお裁き：驚きの法律と裁判』角川学芸出版二〇一〇年
『江戸の名奉行』丹野顯　新人物往来社　二〇〇八年

石狩市の鮫様

（妙亀法鮫大明神みょうきほうこうだいみょうじん）二例を紹介

加藤幹雄

この珍しい神様に私が巡り会ったのは令和五年七月のことです。茅ヶ崎東海岸で晩年を過ごし、昭和二十年（一九四五）に同地で亡くなった「流水の科学者　岡崎文吉」に関する情報交換会が北海道札幌市に隣接する石狩市で開催された時のことです。岡崎文

吉の研究家で石狩市の観光ボランティアガイドもされているＹ氏の案内で石狩川の河口にある石狩灯台を見学し、空いた時間で近くにある石狩弁天社を拝観させて頂いた時にこの神様と巡り会いました。石狩弁天社（創立元禄元年：一六九四、鮭の豊漁を願って建てられた三〇〇年の歴史を誇る市内最古の建物）はこじんまりした拝殿の中に複数のご祭神が鎮座していました。Ｙ氏に尋ねると六柱が合祀されていました。この六柱は弁財天（厳島大明神）大黒天、毘沙門天、稲荷神、恵比須天、鮫様（サメさま）とのことでした。

この六柱の一つ、鮫様が今回紹介する妙亀法鮫大明神です。拝殿の妙亀法鮫大明神の説明板には、

「妙亀法鮫大明神または妙鮫法亀大明神という神様は石狩川の主、チョウザメと亀を神格化したもので本来は鮫と亀が独立した神であった。縁起によればその昔、川幅をふさぐほどのチョウザメが現れて鮭漁の邪魔をしたことがあり、神に祀ってその害を取り除いたという。以来この神は鮭漁の神として場所請負人（注）や、近年になって漁民の信仰が厚く「鮫様」とよばれている。なお、亀の神様についての縁起は不明である。奉納者の小川幸右エ門は江戸の商人と推定される。」と書かれてありました。

（筆者注記）慶長年間（一五九六～一六一四）、石狩河口が松前藩によってアイヌ民族と交易する地点（場所：ばしょ）として、石狩十三場所が設置された。この場所を請け負って運営する人達を場所請負人という。

案内のＹ氏に、鮫様について伺いたいことが色々ありましたが時間がないこともあり、茅ヶ崎に戻ってから鮫様についてネット検索してみました。ネット検索の結果、この石狩弁天社の鮫様について文化庁の文化遺産オンラインに次のように写真と共に掲示されていました。

「弁天社の鮫様は、文政八年（一八二五）に石狩場所の下小屋支配人であった山田仁右衛門が奉納したものです。この像は、金泥に塗られた台座上に、鎧を着け亀の背中に乗った「妙亀」像と、衣冠束帯で鮫の背に乗る「法鮫（ほうこう）」像の二像で構成される本像の名称は、「妙亀・法鮫」のほかに、「妙鮫・法亀」と呼称されることもあります。石狩場所請負人であった村山家が作成した「妙鮫法亀大明神由来（筆者注　ママ）」によれば、文政元年（一八一八）石狩場所関係者の夢枕に石狩川の主とされる巨大な鮫と亀が現れて祭祀を依頼したことから、祠が建立され、続いて文政八年（一八二五）に妙鮫法亀大明神の像が奉納されました。以後、場所関係者などにより祀られ、現在も地元漁業者の信仰の対象となっています。鮫は石狩地方のアイヌの人たちの伝承に見える「石狩川の主」としてチョウザメと結びつくものと考えられ、アイヌの伝承と和人の信仰が混淆した北海道の特色ある様相を呈

しています。」

現地の石狩弁天社の説明板に「亀の縁起は不明」と書かれていましたが、この文化庁の文化遺産オンラインには「巨大鮫と亀が夢枕に立って祭祀を依頼した」と書かれています。筆者が思うに、本来はチョウザメのみの鮫信仰に、後から亀供養が追加され、仏教（妙法）と習合して、いつの間にか現在の「鮫様」になった気がします。そのような意味からすると現地石狩弁天社の説明板にある「亀の神様の縁起は不明」が適切かも知れません。鮫は淡水に生息するチョウザメで間違いないようですが、亀は海亀でしょうか。いずれにしても鮫様は鮭の豊漁と漁の安全の守護神として今も大切に祀られています。

石狩弁天社の鮫様
文政8年

一方、同様の神様がもう一箇所祀られていることも分かりました。それは石狩弁天社の近く、石狩市新町にある宝珠山金龍寺（創建　安政六年：一八五九　日蓮宗）境内の妙見堂内です。石狩市教育委員会発行「石狩ファイルNo.０１３３－０１　宝珠山金龍寺」という印刷物に、

「本堂の右隣にある妙見堂には、妙見菩薩、八大龍王、妙鮫法亀善神（みょうこうほうきぜんしん）（ママ）が祀られています。妙鮫法亀善神は、生振村（おやふるむら）で鮭漁場を経営していた古谷長兵衛が明治二十二年（一八八九）、金龍寺に奉納したもので、平成十九年（二〇〇七）年に北海道有形民俗文化財に指定されています。」

とあります。この妙鮫法亀善神を前述の文化遺産オンラインで調べてみますと、神像写真と共に、石狩弁天社の鮫様とほぼ同じ内容の説明文が掲示されていました。しかし、金龍寺の像は石狩弁天社の像とは異なり、「金龍寺の鮫様」と銘うって、竜神・妙亀菩薩・鮫神像の三体一緒に祀られた像となっています。筆者が思うに、金龍寺の像の形態は、石狩弁天社の神像に竜神が加わり、亀神が菩薩に変化した進化型の像と思われます。

このように北海道には本州にない神様が祀られており、アイヌ人と和人の融合を意識した新しい神の形態だったのかも知れません。石狩市訪問時に、この金龍寺の妙鮫法亀善神を拝観出来ませんでしたが、次の機会に是非、拝観したいと思っております。

なお、鮫に関する神社はこの他、北海道福島町の祖鮫神社（そごうじんじゃ：ジンベイザメを祀る）や北海道木古内にある佐女川神社（さめかわじんじゃ）、などがあり、いずれも豊漁に関する神社です。

令和五年十二月十二日記

金龍寺の鮫様
明治22年

石狩弁天社の外観写真　筆者撮影
石狩弁天社及び金龍寺の鮫様の図　筆者作図

石狩市教育委員会文化財課の坂本恵衣学芸員には、当原稿執筆にあたり、石狩弁天社（石狩八幡神社管理）・金龍寺への連絡及び写真使用についてご配慮を頂きました。ここにあつくお礼を申し上げます。
また、鮫様の画像等の公表を認めて頂きました石狩八幡宮と金龍寺様へもお礼を申し上げる次第です。

筆者

風

自由投稿欄

歌六首

今井文夫

黒墨の夜空に咲いた菊の花
　パラリと散りてむなしき饗宴

野分過ぎ酷暑もともに連れ去りて
　爽やかな朝ひとときの恵み

秋痩せかノラのチビちゃん弱よわし
　骨ばる背中そっとなぜやる

紫の名も知らぬ花しゅんとして
　色鮮やかに我を主張す

イスラエル大義名分ふりかざし
　罪なき民のいのち軽んず

買い物を終えて家路へいそぎつつ
　明日も穏やかであれと願う

私の趣味

吉川弘子

我ながら多趣味だと思います。

これまで多くのことに興味をもってきましたが、最初の稽古はお琴からです。茅ヶ崎の池上実先生の門下生でした。

また、四十年超勤務した会社では当時多くのクラブがあり、スキー部、バトミントン部、テニス部、陶芸部、茶道部、剣道部、謡曲部といろんなクラブ活動に参加していました。

陶芸部では皆で陶芸教室を開いたり、陶芸旅行で「瀬戸、益子」にも出掛けました。部の電気窯で焼いた作品は今も大事にしています。茶道部では五月二週目の日曜日に小田原から先生が来てお茶会を開催し、手作りのお菓子・点心を振る舞いました。剣道部では姿勢が良くなったように思います。また、謡曲部では先輩と一緒に入部してその奥深さにはまりました。

いろいろ楽しいことがありましたが、そのうち母が骨粗鬆症になって寝たり起きたりから寝たきりになって介護が必要となったため、ほとんどは辞めてしまいました。

しかし、その中で謡曲だけは今でも以前の仲間と一緒に東京の区民館を借りて続けており、年二回、六月・二月に発表会をしています。また、東京まで通えなくなると困るので地元の謡曲の会にも加入してお稽古しています。

ここで、私が長年はまっている謡曲を皆様に少しでも知っていただきたく、お話ししたいと思います。

謡曲は能の声楽部分のことで、シテ（能の主役）、ワキ（その相手役）、地謡（謡いを合唱する）といった役割に分かれて謡います。シテは、神や亡霊などこの世のものではないものを演じます。ワキは僧侶など今を生きている人間で、シテのこの世に対する思いを聞き出す役です。

シテ方には、「能楽五流派」と呼ばれる観世流・宝生流・金春流・金剛流・喜多流、ワキ方には宝生流・福王流・高安流の流派があり、これらの流儀は、シテ・ワキならば謡い方・所作がそれぞれの流儀ごとに違っており、我々は観世流です。

まずは私が特に感動した二つの演目をご紹介します。

1　敦盛

能『敦盛』は、平敦盛の死後のお話です。一ノ谷の合戦で大敗

した平家は、一斉に沖の船に逃れようとします。敦盛が馬に乗り、船を目指して海中に乗り出そうとすると、一騎の武将が敦盛を呼び止めます。その武将の名は熊谷直実。直実は敦盛の立派な鎧兜を見て、名のある武将に違いないと思い呼び止めたのです。敦盛は死を覚悟して駆け戻ります。しかし、百戦錬磨の直実に敵うはずもありません。首を取ろうとして敦盛を見た直実は驚きます。敦盛は息子と同じ年頃だったのです。息子の姿を思い出すと直実は敦盛を切ることができません。直実は何とかして敦盛の命を助けようとします。しかし、敦盛はそれを潔しとせず拒みます。そうこうするうちに、源氏の軍勢が迫ってきます。もはや助けるすべはありません。直実は他のものの手にかかるよりはと思い、敦盛の首を打ち落とすのでした。

敦盛を討った熊谷直実はその後出家をし、「蓮生」と名乗ります。敦盛を供養するために一ノ谷を訪れた蓮生は敦盛の霊に出会います。敦盛は蓮生に平家一門の衰退、都落ち、一ノ谷で自身が蓮生に討たれた際のことを語ります。そして仇にめぐり合えたことを喜び、蓮生を討とうとします。しかし、蓮生が自分を供養してくれることを思い、恨みを捨てて去っていくのでした。

2　鉢木

鎌倉幕府五代執権北条時頼の伝説に託して、武士の意地を描いたものです。上野国の佐野あたりを僧が旅をしていると、雪がひどくふってきたので、通りがかりの家に一夜の宿を借りようとします。留守居の妻は夫を迎えに出、その旨を告げます。夫はにべもなく断わりますが、妻のすすめに雪中を追って連れ戻し、粟飯をすすめ秘蔵の鉢木を火に焚いてもてなしました。僧が名を尋ねると佐野源左衛門尉常世と名乗り、具足・長刀・馬を示して落ちぶれても武士の心意気を示しました。

やがて関八州に動員令が下り、鎌倉に馳せつけた常世は痩せ馬に乗って馳せ参じます。時頼は集まった武士の中から千切れた具足、錆びた薙刀、痩せた馬に乗った武士を連れてくるように命じます。呼び出された常世に時頼は自分は過日の僧であることを告げ、その忠誠を褒め、取られた領地を返し、また火にくべた鉢の木の礼にと鉢の木にちなんだ梅田・桜井・松井田の三カ所の荘を与えます。常世は痩せ馬の上で胸をはり、喜び勇んで、本領の佐野へと帰っていくのでした。

いかがでしょうか。ほんの一部ですがなかなか奥が深くて楽しいと感じていただければ嬉しいです。

実は、このほかにも会社を退職したあと始めたことがあります。

まず、朗読です。これまで、藤沢周平の「秘密」や「女下駄」をはじめ、瀬戸内寂聴の「水仙」「源氏物語」等々多くの作家の作品を題材としました。一冊の本の中から読みたい部分を切り取って朗読する時間に合わせて編集するのですが、何回も何回も作り直すので結構大変です。個人的には先輩たちと二か月に一回、グループでは他のメンバーの下っ端として朗読会を適宜開催しています。ご案内しますので、是非とも朗読会にお越しください。古典文学にも手を広げました。現在、枕草子、万葉集の教室に通っています。過去には平家物語、源氏物語、伊勢物語、土佐日記等々をかじりました。

健康面では太極拳を始めました。朝が早いのでさぼってばかりですが、なんとかメンバーとして残してもらっています。

また、踊りが好きなので最近民謡舞踊を始めました。月二回練習しています。コロナ明けの今年は八月の十九、二十日の両日に浜見平の盆踊り大会で踊って来ました。地元の人々が多数集まってたいへん盛況でした。

このようにいろんなことに顔を出して兄姉弟からも呆れられていますが、少しでもボケ防止・健康維持に役立てばと思い、体の続く限りできるだけ長く続けていきたいと思っています。

以上

ロンドンのお寿司屋さん

川村美子

二〇二四年　明けましておめでとうございます。

ロンドンのお寿司屋さん
お店の入口ドアの上に
寿司を握っている絵が描かれている。

ロンドンの友人のお寿司屋さんで、上手にお箸を使い、醤油に溺れそうなお寿司をつまみ、烏帽子岩のようなわさびをつけて、満足気に味わうイギリスの人達！

私はロンドンに来て四十年ですが、ここまで寿司が大人気になるとは？　不思議です。

もっとも、江戸時代にできた寿司が、何百年か過ぎた今、世界中で食されるようになるとは？　不思議です。

そう考えると　すべて不思議　？？？

日本人はどこに行っても土着し、アピールし続けて

今や地元の人たちから、
「日本に行きました。日本人大好きです。日本は素晴らしい」
と絶賛されます。ありがたい限りです。
日本人でよかった。そして、祖母が茅ヶ崎の近くの出身でよかったと思いながら、今年も幸いな年でありますようお祈り申し上げます。
ロンドンより

会員募集

茅ヶ崎郷土会
郷土の歴史・民俗・伝説や昔話・石仏・祭礼・史跡・文化財などを楽しむサークルです。

活動内容
○歴史・民俗の学習、調査、記録
○大岡越前守遺跡写真展
○市民文化祭（茅ヶ崎、みんなのアートフェス）に写真展
○市内、県内の史跡・文化財の見学会

あなたも一緒に始めませんか！
年会費　1,500 円
設立は昭和 28 年
会員　70 人
連絡先　電話 090-8173-8845　会長 平野文明

小津安二郎流「カレー鶏すき」を研究

長谷川由美

映画の巨匠小津安二郎監督が、茅ヶ崎館に逗留し、自室に七輪を持ち込んで自炊をしていたのは有名な話です。そして、「すき焼きにカレー粉を入れた」というのも、半ば伝説的に語られています。では、それはどんなものだったのでしょうか？

一昨年から、茅ヶ崎ゆかりの人物館では、市民研究グループ「ゆかりラボ映画史研究室」によって、一九五〇年十一月から翌五月までの小津安二郎、野田高梧の日記を読み比べ、茅ヶ崎での二人の暮らしぶりなどを検証するという作業が進められました。

この日記の中に、食べ物に関する記述がたくさんあり、「すきやき」「鶏ソップ」「カツ」の自炊も多く登場します。しかしすきやきにカレー粉に関する記述はありません。

では、伝説の「カレーすきやき」の実在を確かめられる証拠は？というと、後年になって野田高梧夫人がインタビューに答えたエピソードの中にありました。それによると、茅ヶ崎館で、小津監督が田中絹代にカレー粉を入れたすき焼きを振る舞ったところ「美味しいですね」と言った。この言葉を得て小津監督は度々つくる。ところがそれは実は不評で、若者たちはカレー粉を隠してしまうほどだった。また、小津監督のすき焼きは、砂糖漬けみたいと言われるほどコッテリ濃い味だったと記されています。

（井上和男編著『陽のあたる家―小津安二郎とともに』）

では、本当のところはどうなのか？ゆかりラボ映画史研究室の小津グルメをテーマにするチームは、好奇心を抑えきれず、カレーすき焼きの実験、実食に踏み切ることになったのでした。

まず、茅ヶ崎館にカレーすき焼きというメニューがあったはずだと思い当たります。森館主に尋ねると、現在は「葉山牛すき焼きコース」の中で、カレー入りを提供している。四人以上の予約制で、九千円くらいから、とのこと。

もちろん自腹になりますので、奮発して清水の舞台から飛び降りる同士を募ったところ、六名が名乗りを上げ、実食。前菜などのあと、人生の中で一番立派なのでは？　と思うくらいのすごい牛肉が登場し、目の前で調理が進みます。茅ヶ崎館オリジナル割下が注がれると、美味しい香りが。まずはお肉と、野菜を普通にすき焼きで堪能した後、ついにカレー粉がふりかけられました。そう、ぐつぐつと煮込むのではなく、山椒などが絶妙に配合された「カレー粉をまぶして味わう」のです。これが現代茅ヶ崎館流だったのです。それが美味しいこと美味しいこと。普通のすき焼きから、いわゆる味変（あじへん・味の変化）が起こって二度美味しいすき焼きになりました。蛇足ですが、六十五年目のぬか床からのお漬物も美味でした。

さて、これでポイントはわかりました。美味しく食べるには、カレー粉をまぶす。山椒を入れるといいらしい。

小津監督は、濃い味のすき焼きにカレー粉を入れたというから、煮込んだものも作ろう。

そして、小津監督、野田氏の日記には「鳥なべ」「鳥すきやき」や、鶏肉が度々登場する。当時、入手しやすい日常の食べ物だっ

たに違いない。私たちは、鶏肉でやってみよう。小津監督は松阪出身なので、関西風に割下を使おうと、方針が決まりました。

調理室を借りて実験開始。材料を切る。割下を作る（某有名店の公開レシピを参考に）。カレー粉と山椒を、割合を変えて配合する。関西風に肉、野菜を焼く、割下の手順で進める。鶏肉ですから、皮から焼き、こんがりとして油が出たところで野菜です。じゅわ～と割下を入れる。

そこで、まず実食一。普通に美味しいです。割下の味で甘辛の鶏すき焼き。次に、茅ヶ崎館流に習い、焼き豆腐を入れ、その上に山椒をのせますと、芳しい香りが…。

実食二　鶏肉にカレー粉をまぶしつつ食べますと、爽やかにスパイシーで美味しいです。ちなみに、カレー粉と山椒の割合は、三：一が美味しかったです。（他に半々、一：三も実験）

最後に、小津流に近いと考えられる「カレー粉を混ぜる」に踏み切りました。鍋の中をかき混ぜ、ぐつぐつしたところで実食三。あれっ、砂糖で甘い、妙なカレーになっちゃった。美味しいとは言い難い。

気を取り直して実食四、ほんの少し購入したスーパーでは高い牛肉を小津流に、砂糖たっぷりの濃い味すき焼きにし、カレー粉を入れました。これは、くどい、美味しくない…。

この実食により、次の考察と計画が生まれました。

①小津流と考えられるカレーすき焼きは、鶏肉、牛肉ともに噂とおり美味しくなかった。田中絹代は気遣いの人だったのだろう。

②茅ヶ崎館は、美味しく食べられる現代にあったカレーすき焼きを、かなりの研究を重ねて提供しているに違いない。（個人的には、いつかまた奮発して食べに行きたい）

③ゆかりラボ研究室流の「カレー鶏すき」は美味しかった。調理実習イベントを開いて、小津グルメの一つとして紹介しよう。

三月末日まで、茅ヶ崎ゆかりの人物館で「小津安二郎・野田高

梧展」が開催されています。この展示では、二人の日記の読み比べを元に、映画『麦秋』の脚本を執筆した時期の二人の茅ヶ崎での暮らしぶりを紹介しています。日常に登場する人物紹介、相関図。散歩、食べ歩き、飲み歩きの茅ヶ崎マップ、そして「カレー鶏すき」実験の報告など。散歩道マップや、カレー鶏スキレシピの配布もあります。

この展示は、ぴあエンタメ情報に掲載され「小津安二郎の生誕一二〇年、没後六十年のトリにふさわしい親密さと深みをたたえた企画」と評され、茅ヶ崎に焦点を絞った研究で「人間小津安二郎の生活圏を豊かに示してくれる」と紹介されました。昨秋は、茅ヶ崎市美術館でも企画展が開催され、こちらは小津監督の作品づくりに焦点が当たり、映画の中の色や、素材感などが感じられました。茅ヶ崎という小さなまちから見つめる小津監督像は、映画を見ている時とはまた違う、不思議なリアル感があり、とても面白いものでした。カレー鶏すきやき、お試しください。

茅ヶ崎ゆかりの人物館企画展「小津安二郎・野田高梧展～二人の日記が映し出す茅ヶ崎」

開催中～３月31日（日）迄の金・土・日・祝日のみ開館

入館料二００円

【今後の関連イベント】

２月10日（土）　小津監督作品『晩春』上映会　無料

３月９日（土）　小津監督が愛した〝鳥すき焼き〟を作ってみよう。調理実習　参加費五百円

３月23日（土）小津・野田の足跡を辿る散歩道　まち歩き無料

（詳しくは、茅ヶ崎市役所　文化推進課まで）

茅ヶ崎郷土会の事業報告・事業予定

第三〇六回 史跡・文化財めぐり（報告）

綾瀬市に早川城址などを訪ねる

平野文明

日時　令和五年十月十四日（土）　参加者九人

コース　茅ヶ崎駅集合―（相模線）―海老名駅―（相鉄バス）―「武者寄橋」下車―（徒歩 以下同じ）―①武者寄橋近くの道祖神―②江川天神社―③早川城址（昼食）―④目久尻川沿いのサイクリングロード散策―⑤宮久保遺跡―⑥瀬端橋近くの石仏―⑦虚空蔵橋近くの石仏―⑧龍洞院―⑨尾の井―⑩五社神社―（相鉄バス）―海老名駅―（相模線）―茅ヶ崎駅【解散】

事前の勉強会　郷土会の史跡・文化財めぐりは、事前に探訪地の学習会を行います。今回は九月十二日（火）午後、市立図書館で行いました。

いつものように、午前八時五〇分までに茅ヶ崎駅改札前に集まり、相模線で海老名駅に、そこからバスで綾瀬市早川を目指しました。

事前勉強会で配布のテキストに掲載したコースは、本番では変更したところがあります。

①　武者寄橋（むしゃよせばし）近くの道祖神二基

この道祖神は『綾瀬市史』六の九〇七頁に掲載されていますが探しても見つからない。見つからないはずです、ガードレールの裏の草ぼっこの中にありました。年銘不明の双体道祖神と、もう一基は「道祖神」、「明治十□年一月「　　」」（注　□は読めない文字）の文字塔でした。何とも特徴のない石仏でしたが見つけたことが嬉しかったです。橋の下の目久尻川の水はきれいでコイがたくさん泳いでいました。

②　江川天神社　早川八〇八

雑草に埋もれるようにしてあまり大きくない社殿がありました。境内には、「文政十亥年（一八二七）九月　神吉日」と彫ってある手水鉢がありました。手水鉢の「神吉日」は他にない書き方です。境内の説明板には次のように書いてありました。

祭神は菅原道真と平 成輔（なりすけ）。享保十五年（一七三〇）に建てられた古碑があり、それには「平宰相成輔卿祠社」と彫ってありました。平成輔は京都の公卿で、後醍醐天皇の親任（ママ）を受け、鎌倉幕府討滅を計画しましたが、失敗して捕らえられ、鎌倉に護送される途中、元弘二（一三三二）年五月、早川河口で殺害されました。その故地は小田原市に現存し、同市指定史跡となっています。当地の早川という昔の村名が、たまたま小田原市の早川と同名なので、後世にここにも祭ったものと思われます。

境内の湧き水は社（やしろ）にとって大切に保護され、飲料水や農業用水として利用されてきました。（平成三年三月　綾瀬市教育委員会）

③　早川城址　神奈川県指定史跡　早川三―四―一

江川天神社の北側には相模原台地が迫っています。早川城址はその台地の南の端にあります。台地の西側は台地に食い込んだ谷戸になっており、谷戸底を目久尻川が南流しています。城址は「城山公園」として整備されていて、その入口は北側にありますが、私たちは南側から登りました。従来、渋谷重国の築城と伝えられてきましたが、発掘調査によって、この考えは変わってきています。

駐車場にある大きな説明板に次のように書いてありました。

平成元年～同六年度に部分的な発掘調査が行われ、山頂にある主郭（しゅかく）を取り巻く堀切、東側の土塁と竪堀（たてぼり　山の上から下へ縦に掘られた堀）、曲輪（くるわ　一定の範囲を土塁や石垣などで囲った区画）と堀が見つかった。曲輪内からは柱穴（ちゅうけつ）も発見されている。出土品の数は少量だったが、瓦器火舎片（がきかしゃへん）やかわらけが出土している。遺構の形状や出土遺物の年代から、築城はこれまで言われていた中世初期（十二世紀末ころ）よりも二百年ほど新しい戦国時代（十五世紀前半）であった可能性がある。本城には戦いの記録はないが、天然の丘陵を利用した、一帯の見張りと緊急的な籠城・防御施設のような「要塞」となっていたのだろう。

発掘調査から中世の山城の様子がわかる遺跡として、平成二十年二月五日に県指定史跡に指定され、現在城山公園として整備された。

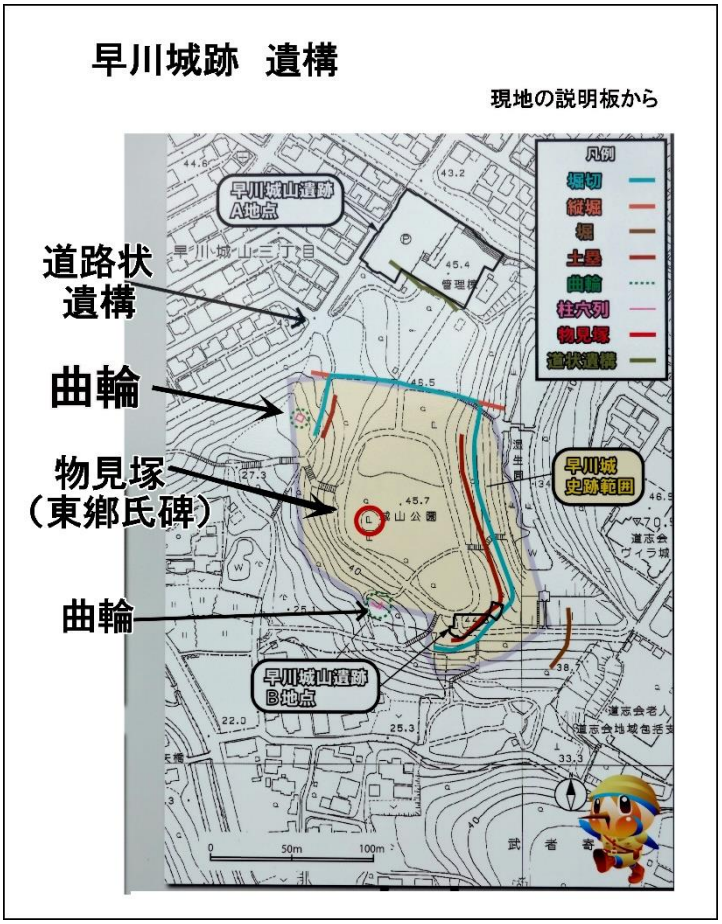
渋谷氏と早川城跡

渋谷氏は平安時代の末期、綾瀬市域を中心に渋谷荘（吉田荘）という荘園を支配し、勢力をもった武士だった。『吾妻鏡』に平治の乱（一一五九年）に破れて奥州に落ち延びていく源氏の重臣佐々木秀義を渋谷重国が保護したとの記事があることから、この頃までには綾瀬市一帯を支配下に置いたものと思われる。

鎌倉時代になると、渋谷重国は源頼朝の御家人となり、その子高重が後を継いだ。高重は早川次郎と名乗り、早川に拠点をおいて一族を統率していたものと思われる。一二一

三年の和田合戦では高重は和田義盛に組したため、高重をはじめ多くの一族が討たれたが、一二四七年、宝治合戦の後、渋谷氏はその軍功により薩摩国入来院ほかに所領を得、地頭となり、その際多くの一族が移っていった。しかし、室町時代の初め頃までは綾瀬市域に渋谷氏の支配が続いたと思われ、その一族が早川城を築城したものと考えられる。

早川城の主郭の跡と言われる部分は、現在の公園の中央部で、かなり広い平らな面です。その西よりに小高い塚があり、「物見塚」と呼ばれています。塚の頂上に「東郷氏祖先発祥地 碑」があり、説明板に次の様に書いてありました。



物見塚と東郷氏 祖先発祥地碑

物見塚は、南北二二メートル、東西二三メートル、高さ約二メートル。発掘調査の結果、表土直下に宝永火山灰（一七〇七年、富士山の噴火の火山灰）が見られることから、江戸時代初期以前に築かれていることは明らか。塚の作り方が土塁と同様の版築（はんちく 黒土と赤土を交互に敷き詰めて突き固めたもの）であることから、城郭の関連遺構の一つであり、外敵の侵入を見張るために築かれた塚であると思われる。塚の上には、昭和七年に「祖先発祥地東郷会」により建てられた「東郷氏祖先発祥地碑」がある。日露戦争で有名な旧海軍元帥である東郷平八郎の祖先の地であることを記念して建てられたもの。東郷家は早川城主であったと伝えられる渋谷氏の末裔の一つで、鎌倉時代に薩摩に移っている。

物見塚と 東郷氏祖先発祥地の碑

公園として良く整備されていますが、現地に、発掘調査の結果の表示は少なく、どこが曲輪、主郭、堀切、土塁などであるか分かりにくいと思いました。「日本庭園」と名付けられた一画で昼食を済ませ、午後の散策に向かいました。

④　目久尻川沿いのサイクリングロード

川の水は澄んでいました。当日は天気が良く、整備されたサイ

クリングロードを数人の人たちが散策していました。ただ、流れの両岸はコンクリートでがっちり護岸されていました。

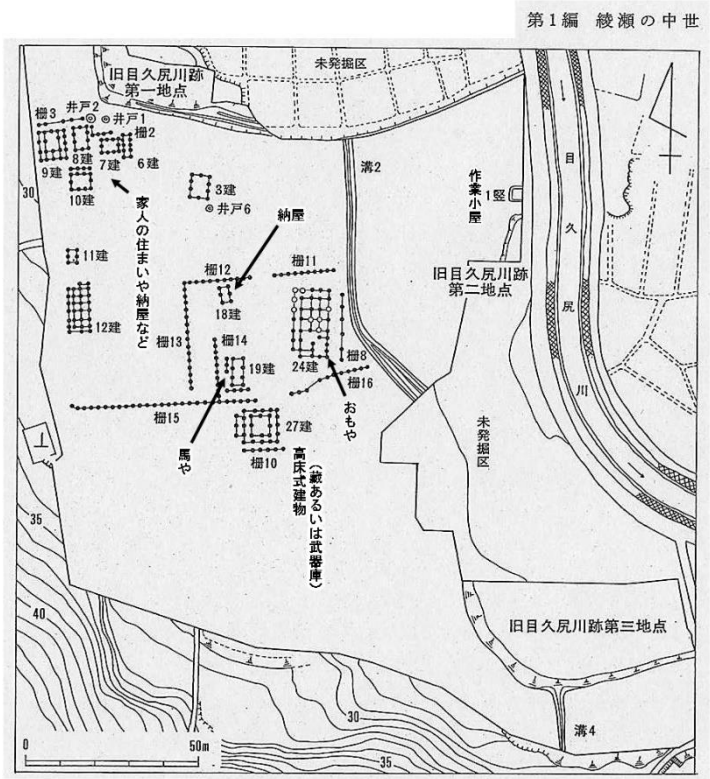
⑤　宮久保遺跡　神奈川県指定史跡　早川一四八五―一

川に沿って遡ると、目久尻川が大きくカーブするところに綾瀬西高等学校があります。遺跡はこの学校建設時に調査されています。しかし現地には何も残されてはいない模様です。説明板に次のようにありました。

宮久保遺跡の調査は、昭和五十六～五十九年に綾瀬西高等学校建設に伴う事前の発掘調査として実施された。座間丘陵の南端、南西斜面にある標高二四～三三㍍の緩やかに傾斜した低地上に位置している。発掘調査の結果、旧石器から近世までの各時代について大きな成果が得られ、中でも中世の館跡（やかたあと）や古代の集落跡が発見されたことに注目が集まっている。

中世では、一二～一五世紀にかけての館跡や、「藤原顕長（あきなが）」の銘文が刻まれた渥美焼の壺が見つかった。この壺は経塚に入れる経筒の外容器で、人物名から、宮久保遺跡の周辺が中央の貴族と結びついていた地域である証（あかし）になる。

古代では、多くの竪穴建物や掘立柱建物が見つかったが、中でも井戸跡には様々な発見があり、井戸枠は、一・五㍍四方の井筒が施され、周辺には玉石が敷き詰められていたほか、井戸をつくるために平坦に整地した層から木簡が見つかった。木簡には天平五（七三三）年の銘があり、「鎌倉郷鎌倉里」と



第33図　宮久保遺跡Ⅰ期の遺構配置

『綾瀬市史』６通史 236頁の図を加工

いう地名や、稲に関係する内容が記されていた。鎌倉郡家は、鎌倉市にある御成小学校内の今小路西遺跡に比定されている。宮久保遺跡は高座郡にあたり、鎌倉郡家から郡域を超えて高座郡の集落に稲が運ばれてきたことがわかる。

木簡のほかに、墨書土器や刻書土器（焼成後に文字や記号を刻んだ土器）も多く発見されており、墨書土器は井戸跡のほか、目久尻川の旧流路の中からも出土している。文字は「生万（いくまん）」などの吉祥句と呼ばれる文字や、まじないに使われたと思われる記号もあることから、井戸跡や旧流路で行われた「水辺の祭祀」に使用したと考えられる。

出土した木簡について、『あやせウオークガイド』に次のように記されています。

『あやせウォークガイド』20頁から転載

宮久保遺跡出土木簡

・「鎌倉郷鎌倉里軽マ□寸稲天平五年九月」

・「田令軽マ麻呂郡稲長軽マ真国　」

（神奈川県教育委員会所蔵）

木簡は昭和五十六（一九八一）年から神奈川県教育委員会による発掘調査で出土し、荷札として使われたと考えられている。長さ約二五チセン、幅二チセン、厚さ八ミリで、両面に三〇文字が墨書されている。天平五（七三三）年の銘と「鎌倉郷」が記載された最古の資料であり、「田令（でんれい）」「郡稲長（ぐんとうちょう）」などの職名や「軽部（かるべ）」という部姓氏族が記されている貴重な資料。

⑥ 瀬端橋近くの石仏

瀬端橋を東に川を渡った道ばたに三基の石仏が並んでいました。中央の庚申塔と左側の道祖神は傷みがあるが、銘は何とか読むことができました。この二基は石質、銘の配置、年号も似ているので同時に建てられたものと思われます。

下見のときに、近くにいた人に聞いたところ、自分の先祖が建てたもので、誰にでも見えるように別の場所から移したとのことでした。

向かって右から

瀬端橋たもとの石仏

○庚申塔　（右側面）慶應二［　］（一八六六）　（正面）庚申　（左側面）願主　尾形徳右衛門／山口治郎□

○庚申塔　（正面）［明治［　］］年正月十四日／庚申塔／［尾］形傳吉建之

○道祖神　（正面）［　　］年一月吉日／道祖神／［尾　　］

⑦　虚空蔵橋近くの石仏

向かって右から

○庚申塔　（左側面）文久元酉［拾　　］（一八六一）

○道祖神（右側面）昭和四十五年一月吉日建之／中村講中

○霊随上人（五二代一遍上人）名号塔　（正面）［南］無阿弥陀佛／一遍上人　五十二代／前他阿（花押）

○庚申塔　（正面）青面［　］（左側面）願主［　］／中

○道路を挟んでこれらの石仏の向かい側にある祠に入った地蔵立像。（着物が着せてあって様態は不明）

（霊随上人の名号塔）

ここで、右記の中の、五二代一遍上人六字名号塔について触れておきます。

藤沢市の遊行寺（藤沢山無量光院清浄光寺）と相模原市当麻の当麻寺（当麻山金光院無量光寺）は開山を一遍上人としてそれぞれ時宗の法灯を継いでいます。その中の五二世は遊行寺では一海上人（明和三年：一七六六寂）、当麻寺では霊随上人（天保六年：一八三五寂）です。

県内の海老名・綾瀬・寒川・厚木・相模原・藤沢市の各市町に右記の五二代一遍上人名号塔があります。これらの塔にはどちらの寺の五二代なのかが彫られて居ないので、藤沢市内にある五基（宮原・葛原神社・用田・亀井野雲昌寺・獺郷東陽院）を掲載した藤沢市史１と『藤沢市文化財調査報告書』第一六集には混乱があり、結局この五塔は当麻山五二代霊随上人に関するものであると、茅ヶ崎郷土会の先の会長、樋田豊広さんが『藤沢市史研究』一六号（昭和五十八年藤沢市文書館刊）に論考「時宗五十二代名号塔について」を寄せています。いささか古い話ですが、我が茅ヶ崎郷土会の研究成果の一つとして紹介しておきます。なお名号塔にある「前他阿」は「さきの他阿」という意味で、法灯を継げば「他阿」を名乗り、次代に譲ると「前他阿」と名乗るのだそうです。

⑧　龍洞院　早川一七六六

『新編相模国風土記稿』早川村の項に次のようにあります。

龍洞院　一澤山と号す、曹洞宗、〈愛甲郡小野村龍寶寺末〉。本尊、聖観音。開山僧香山重蓀〈慶長五年（一六〇〇）四月十七日卒〉

龍洞院の福授大黒天

境内に入ると本堂とは別棟に大黒天の木像が祭られています。お堂の扁額に「福授大黒天／昭和九年如月　甲子太郎翁謹書」とあり、ガラス越しに中を覗くと、巨大な大黒様がこちらを向いておられます。一瞬ギョッとする雰囲気ですが、「福授大黒天」とありますので、その福徳も巨大なのでしょう。

⑨　尾の井（オモイド）　早川一六〇三

先にも触れましたが、目久尻川は相模原台地を切り裂いて流れていますので、川の西側は緩やかな上り坂で、龍洞院からはその斜面をたどります。登り切る少し前に「尾の井」という小さな池があります。台地からのしぼれ水なのでしょう。池の縁にタイル貼りの祠に何かが祭ってありました。水神様でしょうか。『あやせウォークガイド』に次のように説明してあります。

五社神社の社地が、亀に似ていたことから亀居山と呼ばれていました。池が亀の尾に位置するので、亀ノ尾ノ井が略され尾の井やオモイドと呼ばれました。高い所でも水が枯れることがなく、飲み水や田の用水として利用され、雨乞行事も行われました。五社神社の釣り鐘がこの池に沈んでいるという伝説もあります。

尾の井（オモイド）

五社神社に近い海老名市大谷北二丁目の大谷神明社のそばにも今は枯れていますが、かつて「オモイド」がありました。また、茅ヶ崎の下寺尾には「おもよ井戸」があります。茅ヶ崎の例では、むし歯に悩んだおもよさんが身を投げたので、歯痛に効くという話が付いています。（茅ヶ崎郷土会のＨＰ―「郷土会日記」参照）

⑩　五社神社　早川一六一九

尾の井の脇の道を少し上ると五社神社です。本殿と九枚の棟札が市指定文化財、スダジイは市指定天然記念物になっています。『新編相模国風土記稿』早川村に次のように記されています。

五社明神社　地神五座（筆者注　あまてらすおおかみ・おしほみみのみこと・ににぎのみこと・ひこほほでみのみこと・うがやふきあえずのみこと）を祭る。神体はともに木造、村の鎮守。祭礼九月十五日。社地の形状、亀の背たるをもって亀居山と呼べり。社後に尾ノ井と号する御手洗池あり。亀ノ尾ノ井の略語なり。慶安二年（一六四九）八月、社領一三石の御朱印を寄せらる。本地堂に軍荼利夜叉明王を安んず。△日本武尊腰掛石、華表（鳥居）の側にあり。径二尺ばかり、その形士峰（富士山）に似て青白色なり。尊、東征の時憩い給いし所なりと云う。△別当、実像院、本山修験〈聖護院末〉、早川軍荼利寺と号す。開山 浄覚〈園城寺の衆徒なりと云う〉中興 乗融〈承応四年：一六五五　四月十五日卒〉、本尊 不動を安んず。△別当、教覚院。実像院の中興 融健

〈実像・教覚二院職を同す〉山号、寺号、本尊などすべて実像院に同じ。

また、『綾瀬市史』六の九〇二頁には次のように記されています。

渋谷重国の孫で渋谷定心の建長二年（一二五〇）十月二十日の「渋谷定心置文案」に「五所宮のお祭りのとき、もしくは御修理のあらん時は、先例を訪ねて、程に従いて、その役を勤むべし、対捍（たいかん＝逆らう）すべからず」。

この資料から神社は平安末の建長のころは存在して、渋谷氏の氏神だったことが知られます。『綾瀬市史』六の一〇七一頁に「渋谷荘の鎮守が渋谷氏の鎮守へ転換したのだろう」とあります。

同書同頁に、慶安三年（一六五〇）九月の「護国山五社大明神略縁起」の引用があり、次のように記されています。

花園天皇の正和二年（一三一三）の春、三井の門徒浄覚が日本遍歴のみぎり当山に参籠し、背負ってきた五大明王（不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉王）を本地と崇め、一宇の精舎を建立した。亀居万年治国の誓願を凝らし護国山と号し、五大の神社を再建し、氏人称して五社の宮と仰ぎ奉る。然るに景虎（上杉謙信）出陣のとき兵火にかかり、五大神輿は移したものの、すべて灰燼に帰すなか、軍荼利一尊だけ消失を免れた。そこで早川山軍荼利寺と云う。

これらのことから、五大明王を祭っていたのが、後に軍荼利明王一尊になり、『風土記稿』のころは地神五座が祭神となったと変化しているようです。『あやせウォークガイド』には次のように記されています。

祭神は天照大神など五柱の神々です。慶安三（一六五〇）年の縁起には、日本武尊が東征を終え帰洛する時、この地に地神五代を祀ったのが起こりと書かれ、境内には「日本武尊腰掛石」があります。鎌倉時代には渋谷荘と呼ばれたこの地域の総鎮守だったと思われます。また、現在も綾瀬市域の中心的な神社です。

五社神社の本殿は市内唯一の三間社流造りの建物です。三間社とは、正面に四本の柱を用いた形式のことで、流造りとは正面側の屋根を長く伸ばし、向拝（こうはい）の庇（ひさし）も併せて覆う形式のことです。弘化二（一八四五）年の棟札によれば、鎌倉の円覚寺の大工棟梁であった高階隼人通直（たかしなはやとみちなお）が五六歳の熟年期に造営したもので、鎌倉大工の伝統的技術をうかがうことができます。五社神社には正

保四（一六四七）年から大正十五年（一九二六）までの九枚の棟札が伝えられています。

社殿後ろにあるスダジイは、樹齢四百年、樹高二〇㍍、胸高直径二㍍、市内随一の古木で、五社神社の御神木になっています。スダジイは本州の福島県以西、四国、九州に分布する照葉樹林の代表的な樹種です。

筆者は慶安三年の縁起を見ていないのですが、三井寺の門徒浄覚が五大明王を勧請したという話と、日本武尊が地神五代を祭ったという二つの縁起が書かれているのでしょうか。

境内に日本武尊が腰掛けたという「腰掛石」があります。茅ヶ崎市芹沢の腰掛神社にも同じ伝説を持つ腰掛石があります。五社神社の別当寺は本山派（天台宗）の実像院、腰掛神社は当山派（真言宗）の宝沢寺で、宗派は違いますが両神社とも修験が関係しています。腰掛石の伝説には修験道が結びつくのでしょうか。

『あやせウォークガイド』に、弘化二年に建てられたとある本殿は、現在の拝殿を覆い屋として、その中に今もあります。私たちは宮司さんの特別の計らいで、拝殿にあがって見学しました。拝殿内には、覆い屋で覆われる前の本殿の写真が掛けてあり、複写させて頂き、丁寧な説明を受けました。宮司さんには、ここに改めてお礼を申し上げます。

参道の脇にある腰掛石を見て神社を後にし、この日の史跡文化財めぐりを終了しました。

めぐりの計画段階では、『あやせウォークガイド』に「渋谷氏一族の菩提寺といわれ、一族の供養塔と伝えられる中世石造物が残っている」と書かれている崇福山長泉寺（曹洞宗）も訪ねるつもりでしたが、コースが長くなるので割愛しました。

【引用・参考文献】
『あやせウォークガイド』平成三十年綾瀬市教育委員会刊
『綾瀬市史』六　通史編（中世・近世）平成十一年綾瀬市刊

（令和五年十二月十一日　記）

その他の事業報告

令和五年度 茅ヶ崎市民文化祭で、

茅ヶ崎郷土会の写真展

（公財）茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団主催及び茅ヶ崎市共済の「茅ヶ崎、みんなのアートフェス２０２３」参加事業

日時　十月二十七日（金）　13：00～16：00
　　二十八日（土）　09：30～16：00
　　二十九日（日）　09：30～15：00

会場　茅ヶ崎市民文化会館Ａ展示室

展示した写真

１　史跡・文化財めぐりの記録

通算三〇三回　「下寺尾の史跡と遺跡を訪ねる」（令和四年十二月十日実施）

通算三〇四回　「伊勢原市の丸山城址と太田道灌などの史跡を訪ねる」（令和五年三月十一日実施）

２　相模川河口付近の野鳥たち　（九八種類）

３　市内北部丘陵の野鳥たち（三〇種類）

４　柳島海岸から見た風景（二四景）

５　第５０回茅ヶ崎市郷土芸能大会（一二演目）

第五一回 茅ヶ崎市郷土芸能大会開催に協力

令和五年十一月二十六日（日）　12：00開場　13：00開演

茅ヶ崎市民文化会館 小ホール

出し物　(1)一人遣い文楽「寿式二人三番叟」（県立茅ヶ崎高等学校文楽部）、(2)茅ヶ崎の民話「堤の巴御前」（茅ヶ崎民話の会）、(3)柳島お座敷甚句（柳島エンコロ節保存会）、(4)圓藏馬鹿踊り（圓藏祭囃子保存会・岡崎部会）、(5)市指定重要文化財　芹沢焼米搗唄（芹沢焼米搗唄保存会）、(6)上赤羽根甚句（上赤羽根太鼓保存会）、(7)市指定重要文化財　南湖麦打唄（南湖郷土芸能保存会）、(8)南湖餅搗唄（南湖郷土芸能保存会）、(9)上赤羽根祭囃子（上赤羽根太鼓保存会）、(10)芹沢ササラ盆唄（芹沢焼米搗唄保存会）、(11)市指定重要文化財　圓藏祭囃子（圓藏祭囃子保存会）、(12)柳島大漁船上げ唄（柳島大漁船上げ唄交友会・市立中島中学校一年生有志）、(13)市指定重要文化財　柳島エンコロ節（柳島エンコロ節保存会・市立中島中学校二年生有志）。

昨年度は都合によって欠場した茅ヶ崎高校文楽部の三番叟が出演しました。半世紀ほども続く郷土芸能大会は、いずれの出演大体も素晴らしい演技を披露していました。

第三〇七回史跡文化財めぐり

「大和市に諏訪神社・深見城址等を訪ねる」

令和五年十二月九日（土）　無事に終了しました。

令和六年三月までの事業予定

史跡文化財めぐり事前の勉強会

「市内の東海道を訪ねる①」小和田から菱沼まで

日時　令和六年二月二十日　13：30～16：00

会場　茅ヶ崎市民文化会館　第三会議室

（会場がいつもの図書館から文化会館にかわります。）

新しい年を迎え、会員の皆様の無事健康と
一層のご発展をお祈り申しあげます

会長　平野文明
副会長　杉山　全
事務局長　熊澤克躬
会計　尾髙忠昭
理事　山本俊雄
理事　森　早苗
監事　羽切信夫
相談役　青木昭三

第二〇八回　史跡文化財めぐり

『市内の東海道を訪ねる①（本番）』令和六年三月九日（土）
集合時間・集合場所　検討中

市内二三ケ村の歴史調査（中島村）

①令和六年二月六日（火）13：30から
会場　市立図書館第二会議室
②三月五日（火）13：30から
会場　市立図書館第二会議室（予定）
③三月十九日（火）13：30から
会場　右に同じ（予定）

コミュニティセンター湘南主催の講座「地域の歴史を学ぶ」が、来年の三月十四日と二十一日（共に木曜日・10時から）に予定されています。茅ヶ崎郷土会に講師依頼がありました。内容は検討中ですが、多くの方の参加を望みます。

【編集後記】

この会報は一月、五月、九月の初日に発行しています。発行日の一週間ほど前に印刷します。場所は茅ヶ崎市民活動サポートセンター。毎回大変お世話になっています。以前は原稿の版下を印刷機のガラス板に置き、コピー機を使うように印刷していましたが、今は版下のＰＤＦデータをパソコンから印刷機に送り、画像が以前より鮮明になりました。

さて、今回も一五九号を出せるだけの原稿を頂きました。執筆者の皆さんにお礼を申し上げます。平野会員の原稿は大山寺本堂の彫刻がテーマ。本堂を国の登録有形文化財（建造物）にという答申が出されたことと時期が合いました。石黒会員の「越前守忠相ノート」は三回目。「ノート」とありますが、本市に関わりのある忠相公ですから、執筆回数が増えていくことは良いことです。加藤会員の、石狩市に祭られる「鮫様」は、神奈川に住む者には珍しい神様です。筆者が紙面に記しておられるように、石狩市の職員の坂本様と関係者の皆様には編集子からもお礼を申し上げます。「自由投稿欄 風」にも多様な原稿を頂きました。郷土会々報は会員のものです。喜び、悲しみ、思い出、希望、俳句に短歌に一人ごと、もっと言うなら若者放言、老いの繰り言、お寄せください。　皆様、ではまた会いましょう。

（編集子）

―250―